
天秤の上、意志の在処

綺鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天秤の上、意志の在処

【Nコード】

N8899Y

【作者名】

綺鏡

【あらすじ】

六十余年前、超能力者が現在より生きにくかった時代。超能部隊隊長、早乙女とタイムトリップをしてしまったバベルにてザ・チルドレンの主任をする数年前の皆本光一少年のお話。

パラレル設定です。

（前書き）

完全なるパラレル且つ厨二設定が多いです。

皆本少年は十五才くらいと考えてください。

単に早乙女さんたちと皆本さんを絡ませたく、尚且つ早乙女も悪い人と一概には言えない人なんだとちよつと妄想した結果の産物です。とりあえず、尻切れトンボなので平気な方のみどうぞ。

続きもありますがUPするかは決めておりませんので悪しからずご了承ください。

争いで決まるのは、誰が生き残るか　ただ、それだけが重要なことであり、正義かどうかなど二の次だ。

戦争の中に身を置いて、早乙女の見つけた世界の真理の断片。正しいかどうかなんて、関係はなかった。

これは自分自身の持論であるし、何より正義など相対的で、絶対ではないのだから。

故に早乙女は自分が悪でも構わないと思うほどには、偽悪的な偽善者だった。

「上層部に、非国民の烙印を押されかねない思考を垂れ流しにしないでください、早乙女大尉」

「うん？ああ…君か。それは超常能力者でもなければ無理な話だからね。私が上司なのが気に入らなければ、どうしても構わないけれど」

春の陽気な風に当たろうと官舎の屋上にいた早乙女は近くにいつの間にか立っていた青年に笑う。

宇津美清史郎　彼もまた、超常能力者の一人だ。

早乙女の後輩で、仕官学校では一時期共に随分な無茶をやらかした仲だった。

今でも宇津美は母親の言い付けで伸ばした髪を巡って他の軍人達と揉めることも多い。

まあ、やられたらえげつない方法でやり返すから、連帯責任を恐れて今では突っ掛かる者も大分減ったらしいが。

「まさか。貴方以外に、我々を率いられる者はいませんよ」

「買い被りすぎだ。私は、人の上に立つに値しない人間だよ。上から命令があれば、仲間である君ですら殺せる」

嘯いて、早乙女は息を吐く。

見下ろした手は今では多くの同胞の血で汚れていた。

軍で超常能力者を特別編成した部隊を作ろうとは宇津美達と出会う前から考えていたことだ。

上に何度も諮り、その度に出された条件を受け入れた。

多くが造反した同じ日本軍人の処分だった。

彼らが非国民と言われようが、早乙女には持論からなる性格からそうは思い切れない。

重いものを多く背負いながら、早乙女は漸く念願を叶えた。

「ええ、知っています。貴方がこれまで、何を犠牲にしてきたのか。超常能力者を何の力もない普通人の貴方が、誰よりも僕達を守ってくれていることを、ね」

やはり隠し事は通じない。

だが、透視して読める矛盾した思想に、歪な考えに、宇津美は何も言わない。

信頼されているのか。

それとも、いつでも普通人である早乙女のことなど消せるという顯れか。

無論、彼が平和主義者だと知っているが内心など分からない。前者だと都合の良い方にとって、宇津美を見た。

そして人気がないからこそ、話せる内容を口にする。

「いつか、普通人と超常能力者は対立するだろう。今でさえこの有り様なんだ、簡単に予想がつく。私は等しく平等で有るべきだと思うんだ。超能部隊はその為の布石。後は戦争への勝利に貢献できたなら、一石二鳥だがね」

だがそうもうまくことが運ばないのは今まで生きてきた経験で分かる。

そんな簡単に、人生は転がらない。

誰もが足掻いて、のたうちまわって、それでも手に入らずに、叶わずに嘆くのだ。

挫折しない人間など稀で、そしてその中に早乙女は当てはまりはしなかった。

「貴方は変な所で後ろ向きですね」

「…上がもしも超常能力者を敵と見なせば、私は命令に従い君達を殺すだろう。私は軍人という枠から逃れようとは決して思わないからね。君らに恨まれ、殺されるのも覚悟の上だ。自己中心的な最低な男……後ろ向きじゃなく、自分を誰よりも理解しているだけだ」

自分勝手な人間らしさ。

笑おうにもどうしようもない程に滑稽だった。

自らの裏切りを予期しながら、仲間面するなんて、とんだ茶番に他ならない。

利用するだけ利用して、要らなくなったなら始末する。

悪役以外の何者でもない、そんなハズレ籤を引き当ててしまった人生を、不幸と嘆くのは簡単だ。

けれども…。

「偽善者だ、私は。何れ君達超常能力者を、親しい人を、共に戦った仲間を殺さなければならなくとも、出会わなければ、部隊を作らなければなんて思えやしない」

「僕も貴方に出会えてよかったです。いつか殺されようと、殺すことになるうと　貴方が今、本気で超常能力者を護ろうとしていることに嘘偽りは何処にもないのだと、分かりますからね」

跳ね返されるばかりで交わらない言葉。

会話のようでいてその実、互いに擦れ違った独り言を告げあっているにすぎないのだ、これは。

その時までの、言い訳を言い合っている。

「……隊長」

呼ばれて顔を上げれば宇津美の長い髪が目の前で揺れていた。

「僕は、そうなっても抵抗しませんよ。貴方が決めたことだとすれば」

「……ならば、手始めに髪を切りたまえ」

笑い混じりに言えば、それとこれは別だとばかりに睨まれた。

あくまでも冗談だからこの程度で済む。

本気なら酷い目に会わされるところだ。

超常能力者が問題を起こせば何もかも、早乙女が責を負わされる。

非難も甘んじて受け入れて、折衝役にならないければならない。

頑固なのは美德でもあり短所でもある。

だが意地を張るのを、早乙女はいつしか忘れてしまっていた。

だから部下達が色々切磋琢磨しているのを見るのは楽しい。

「何故私は超常能力者ではないのだろう？」

隊長である以上、一線を画して、普通人と超常能力者という能力の差からも彼らの輪には入れない。

必要はないにせよ、寂しさはある。

「た、…」

「可笑しな話をしてしまった。宇津美君、今のは聞き流してくれ」

「……………はい」

不思議と宇津美といると深い部分まで話し込んでしまう。

彼は聞き上手なのだろう。

言っではならないことまで口をついてしまった。

「あれ……………早乙女？」

それに宇津美さんだ、と声がした。

振り向けばそこにはまだ幼い少年の姿があった。

声変わりもまだの少年は、屋上への扉を押し開いてひょこりと顔を覗かせていた。

軍服に白衣という奇妙な格好だが、それが妙によく似合う。

「お久しぶりです、皆本大尉」

「宇津美さん、海軍に同行していたと聞いていたんですが、無事に戻れたんですね」

良かった、と笑う少年に、早乙女も宇津美も自然と顔を綻ばせていた。

「珍しいね、地下の引きこもりに厭きたかい」

「いや…そうじゃなくて。ちょっとまずいことになりそうなんだよ。早乙女、この前陸軍の空撃部隊に喧嘩売っただろ？」

「そんなこともあったかな？まあ…あれは君の技術を馬鹿にしたから珍しく頭にキテね」

「そもそも身元が知れない上にこの歳で士官なんだから仕方ないやつかみだよ。それで、海軍の戦艦の設計に携わらなきゃならなくなつただけど…」

「ん…？どという風の吹き回しだ。仲の悪い奴らに恩でも売る気が」超能部隊ではその壁を取っ払って行動しているとはいえ、陸海の確執は深い。

敵に塩を送るなど愚の骨頂だとの思想が根深くあるのだからその話はおかしかった。

「そうでもないよ。…ドクイツ帝国に出向しろって命があった」

「皆本特務技官　その発令したのは何処の誰ですか」

低い声音で、据わった目付きになった宇津美を横目に早乙女は溜め息を吐く。

落ち着きながらもどこか焦った風のある少年は、泣きそうに瞳を潤ませていた。

「あの国は海域や空域は哨戒が厳しい。こないだだってUボートが連合軍に沈没させられてるのに、行き過ぎた嫌がらせだよ」

「確かにやりすぎだな。だが……」

軍命となった以上、逆らえば銃殺刑だ。

「ドッグファイトなんて、到底無理だ。各国共通、機体が遠距離飛行に向いてないからね。そもそも、僕はこの時代の人間じゃないのにどうしてこんな目に遭わなきゃならないんだろ……」

ぼやくのも無理はない。

幼いながら大人びた少年に、早乙女も宇津美も頼りきりだった。

何よりその優れた頭脳は、ヘタな超常能力者よりも有効だ。

一を知れば十処か百を把握できるのだから。

宇津美の暗号読解も、皆本には及ばない。

そして、本来ならばこの少年はこの時代に居よう筈もない存在だった。

今はこうして馴染んでいるが、知り合いだかに時空間を吹っ飛ばされて戦時中に来てしまった当初はそれはもう今の彼とは結び付かない慌て振りだった。

戦争に慣れるのは人の死に慣れること。

それを思えば、純粋な少年を人が持つ暗黒面に触れさせてしまったのが悔やまれる。

「あうう…でも、仕方無いか…。半月したら行かなきゃいけないらしいんだけど、逃げられないし」

「艦の護衛につけるよう、手配してください、隊長」

宇津美が暗い光を湛えた瞳を向けてくるのを犇々と感じながら、早乙女は今日何度目ともしれない溜め息を吐くのだった。

（後書き）

結果は同じにしても、こんな人だったら多少は救われるかな、と。
兵部さんはそんなこと望んでいないでしょうけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8899y/>

天秤の上、意志の在処

2011年11月26日20時58分発行